

分かりにくい江戸時代の時刻

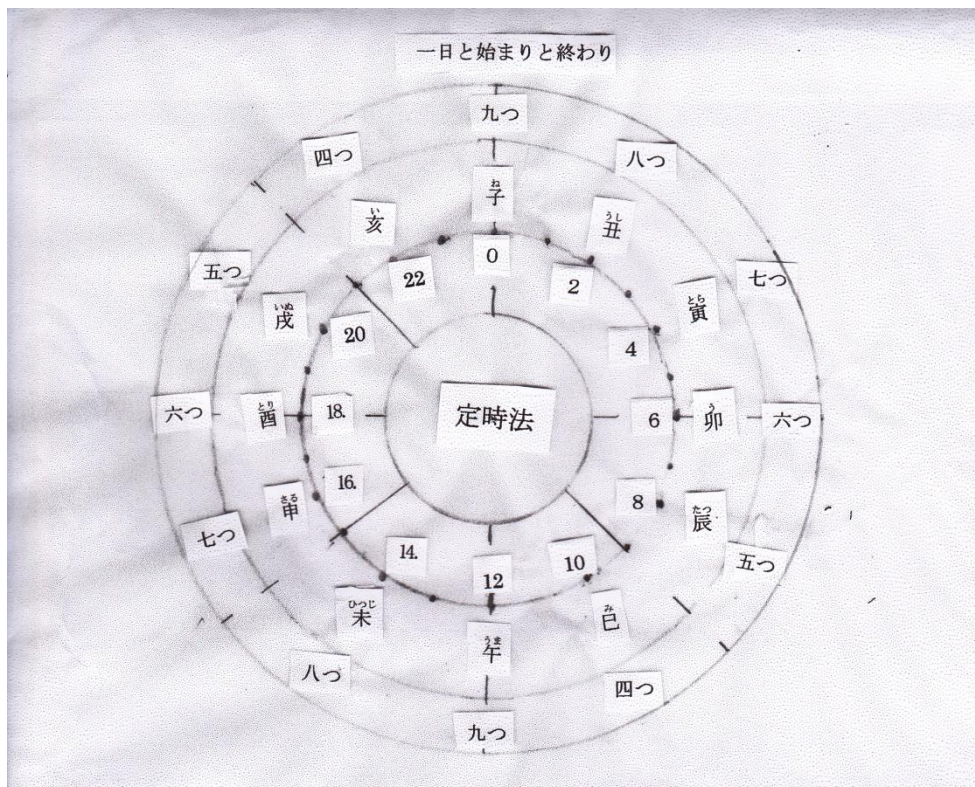
ご存知でしょうか。「お江戸日本橋七つ立ち初上がり 行列揃えて あれわいのさ こちゃ高輪 夜明けのちょうちん消す こちゃえ こちゃえ……」と俗謡に謡われました。七つ立ちですが、七つの時に日本橋から京に向かって旅に出立する意味です。それでは江戸時代の七つとは今でいう何時でしょうか。

七つは24時間に明けと暮れの2回ありますが、この場合明け七つです。季節がはっきりしないのですが、冬ですと現在の時刻で午前4時頃です。夏ですと午前2時半頃でいず。いずれにしろ未だ真っ暗です。江戸時代京都に上がる旅は、普通真っ暗な時刻に出発します。そして高輪（品川あたり）まで歩いた所で夜明けとなります。明け六つです。歌詞にも高輪で夜明けでちょうちんを消すとしています。夏でも冬でもどの季節でも夜明けは明け六つです。

例題の話はこれぐらいにしまして、それでは江戸時代の時刻の数え方、表示について概略をお話しします。

江戸時代まで日本では時刻の数え方は定時法と不定時法がありました。現在は定時法だけです。

まず古代から使われていた定時法です。下図定時法をご覧ください。



1日24時間を十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）

で表示しました。子は現在の午後11時から午前1時前での間、丑は午前1時から午前3時前までで以下亥まで同じ間隔です。の間隔はみな同じで現在の2時間です。

この定時法は古代から江戸時代まで使われていました。使っていた人たちは朝廷の官吏や天文方で、古代、中世の一般の人たちは朝、昼、晩がわかればそれで良い生活でした。

その後一般の人でも朝昼晩だけの区別だけでは少し乱暴なので明るくなる時、暗くなる時を基点に1日の24時間の割り振りを決めました。これをやはり十二支からとって、夜明けは卯の時で、日暮れが酉の時にしました。

これを不定時法と言います。下図不定時法をご覧ください。

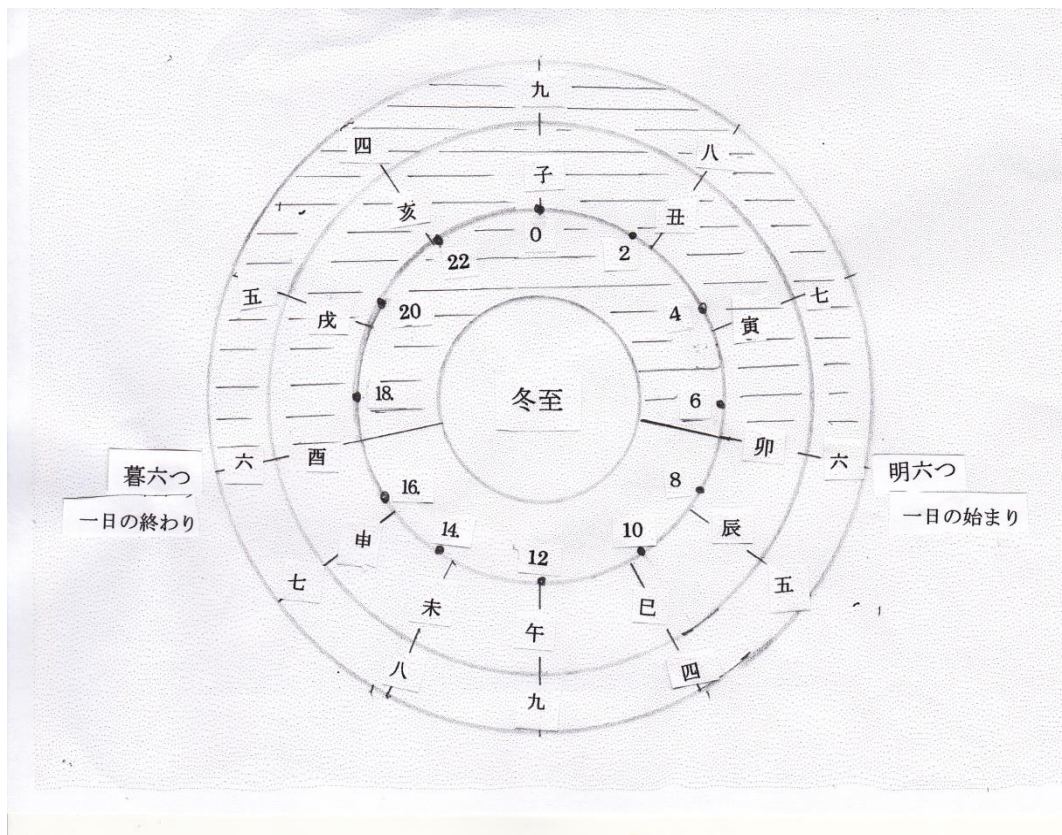
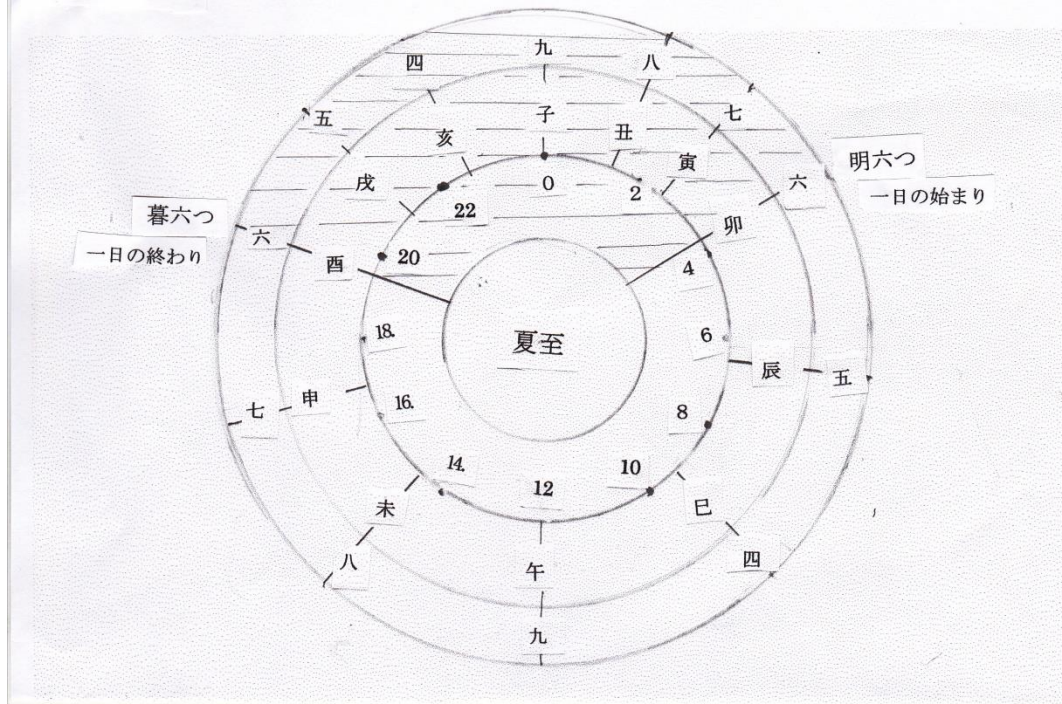


図2 不定時法



江戸時代に入りますと十二支の呼び方も残りますが、九つから四つまでの数字での数え方が主流になります。これは時刻を知らせる鐘の音の数からによるものです（時刻を知らせる鐘については後述します）。

これを知ってください。時代劇や歴史小説、映画、テレビドラマが一層面白くなります。

子は九つ、^{うし}丑は八つ、^{とら}寅は七つ、^う卯は六つ、^{たつ}辰は五つ、^み巳は四つ、そして^{うま}午は

又九つに戻ります。順次^{ひつじ}未は八つ、^{さる}申は七つ、^{とり}酉は六つ、^{いぬ}戌は五つ、^い亥は四つで、これで一日24時間です。

一日を朝明るくなり始めた時の「明け六つ（卯）」から数えますと、順次・「五つ（辰）」・「四つ（巳）」、そして戻って「九つ（午）」（お昼の正午）又順次「八つ（未）」・「七つ（申）」から日が沈んで暗くなった直後の「暮れ六つ（酉）」で、「五つ（戌）」・「四つ（亥）」そして「九つ（子）」に戻って「八つ（丑）」・「七つ（寅）」そして翌朝の「六つ（卯）」となります。一日は明け六つに始まり、昼間となり、暮れ六つからは夜です。明け六つから明け六つが1日です。

整理しますと、数字は9・8・7・6・5・4だけで24時間を表します。

順次下がり、又もと元の9に戻る繰り返しです。(1日24時間を六つの数字で表します。よって同じ数字を二度使います。)

不定時法が江戸時代一般に定着していきます(役所の天文方を除く)。

一日の始まりは東の空が白んできた時が明け六つです(太陽が地平線に見え始める日の出より早い)。

暮れ六つは太陽が西の空に沈んだ後の薄明かりが無くなり、星が見え始めたときです。(太陽が地平線に沈む日没の少し後)

明け六つ、暮れ六つの時刻は毎日変わることになります。

大よその見当では明け六つは冬至は午前6時頃、春・秋は午前5時ごろ、夏至は4時頃となります。

暮れ六つは冬至は午後5時頃、春・秋は午後6時半頃、夏至は7時半頃となります。

それぞれ昼間と夜間を六つの時で割り等分しますが、季節の移りによって(毎日)昼と夜の長さが違いますので、夏の昼間の一時^{いっとき}(一つ一つの間、十二支間)は冬より長く、逆に冬の夜の一時は夏より長くなります。

昼間では冬至のころの一時^{いっとき}は1時間50分位で、夏至のころの一時^{いっとき}は2時間40分位となり、一時の長さが50分位の差が出ます。これが不定時法です。

江戸時代の一般社会ではこの不定時法を用いました。

まあ年間平均して一時^{いっとき}(つの間、十二支の間)は約2時間です。小説を読むときはこの感覚で良いでしょう。

ただ明け六つが夏は午前4時頃、冬は6時頃、暮れ六つは夏は午後7時半頃、冬は5時頃とさせていただくとリアルティが出てくると思います。

本来、時^{とき}(十二支でも九つ~四つでも)は幅(約2時間)を示しました。例えば夜の九つ(子)の時は午後11時~午前1時の間を言いました。

しかし鐘の音の四つとか九つとかを時を表すようになってから、鐘の打つ時刻即ち時の真ん中の時刻(正刻)、九つですとちょうど12時に鐘を打ち、そこを九つと言うようになりました。

夜の八つは午前2時ちょうどです(本来は午前1~3時)。順次同じです。

一時^{いっとき}は約2時間となり少し長いので、一時の間に半を入れました。九つ(1

2時)、九つ半(1時頃)、八つ(2時頃)、八つ半(3時頃)、七つ(4時頃)、七つ半(5時頃)・・・・・・・・・・と言いました。

次に九つとか八つとかの数字の意味です。

なぜ十二支の数え方から九つから四つの数え方が主流になったかと言いますと、それは江戸時代、特に江戸はじめ都市で鐘による時報を知らせたことからです。何故九から四かは分かりませんが、一とか二は数が少なく、逆に数が多すぎると聞く人が数えにくいからでしょう。

江戸時代になりますと、一般社会特に都会では、一日が朝昼晩夜位の違いを知るだけでは社会の運営に支障をきたします。

そこで江戸市中に鐘楼をもうけて一定の時刻に鐘をつかせました。鐘の音の数で時刻を知らせるのです。

夜中(午前0時)の子の時が九つ鳴らし、丑の時が八つ、寅の時が七つ、卯の時が六つ(明け六つ)、辰の時が五つ、巳の時が四つ、午の時が九つ(正午)、未の時が八つ、申の時が七つ、酉の時が六つ(暮れ六つ)、戌の時が五つ、亥の時が四つ、後は又子に戻り九つ鳴らします。

最初に“捨て鐘^{がね}”と称して三つ鳴らしてから時刻の数を鳴らします。捨て鐘は最初の一つと次の二つ目の間は約1分、三つ目は間なくそして約1分半過ぎて時の数を鳴らすのです。時の鐘は徐々に早く鳴らします。

江戸市中には鐘楼が浅草寺内、上野文殊堂の西、石町4丁目、芝愛宕下、目白不動前、本所入江町、深川八幡宮の境内、市谷八幡宮等8か所以上ありました。

鐘を打つ係は、時刻を和時計で知ります。戦国時代に入った機械時計(定時法)を日本で不定時法に機械調整して使用しました。

一日の始まりにつてです。

江戸時代まで夕べ(昨夜)と言えば午前0時以降であっても明るくなるまでは前日です。一日の始まりは朝が明けた卯の時(明け六つ)からで終わりは翌日の卯(六つ)前までです。

明るくなったら起きて食事をし、働きはじめ、暗くなる前に仕事をやめて、店を閉めて明るいうちに食事をして寝るのです。夜は一般の者は原則灯をともして仕事や勉強はしません。夜中に起きているのは水商売の人、遊び人か泥棒です。勉強や仕事をする人は稀です。灯油やろうそくは高価です。

江戸時代は定時法は天文の専門家、研究者が使用し、不定時法は武士も、百姓も町人も一般の者が使用しました。

多くは鐘の音の九つから四つの数字で呼びましたが、十二支（子～亥）も使いました。

時は本来は時刻から時刻の幅を称したのです。江戸時代に入り、時刻を鐘で知らせるようになってから、六つと言えば幅ではなくその時刻を指すようになりました。

しかし例えば子の時を午後1時から午前1時の幅を示す方法も生きており、そして一時を上刻、中刻（真ん中の時刻）、下刻と分ける方法も使われていました。

よって混乱もあったようです。

その外に、夜中を五つの更に分ける呼び方もありました。インテリの間で使われていたようです。

ややこしいですが、まあ一応は、鐘の音の数から知らせる九つから四つの表し方（間を半）を一般的として理解しましょう。

以上

2017年5月7日

梅 一声